

地域活動に主体的に取り組む若年層の意識 —南あわじ市「地域担い手づくり事業」を通して—

三宅康成* 服部祐亮* 平良りんこ* 橋本朋佳* 峯松優菜* 三宅康介**
*兵庫県立大学環境人間学部, **京都大学大学院地球環境学舎

キーワード：担い手づくり, 若年層, 地域活動, 移住, 地域資源

1. はじめに

1.1 目的

南あわじ市では、令和5年から「地域の担い手づくり事業」を実施し、市内の若者や青年層が主体となって実施する地域づくり事業に対して補助金を交付している。本研究では、地域の担い手となる若年層の意識を明らかにすることで、今後の地域づくり、担い手づくりのあり方に向けた基礎資料を得ることを目的としている。

1.2 調査の概要

(1) 調査対象

地域の担い手づくり事業に採択された11団体とする。

(2) 調査者

兵庫県立大学環境人間学部三宅ゼミ

(3) 調査方法

上記団体に対して以下の(4)に示す内容として、1団体につき約1時間程度の半構造化インタビュー調査を実施する。

※インタビューは録音し、AIソフトにて議事録を作成した。

①プレ調査：2団体を対象として実施

2024年9月5日（2団体）

②本調査：9団体を対象として実施

2024年12月19日（6団体）

2025年1月28日（3団体）

(4) 調査内容

1) 属性

①性別, ②年齢, ③家族構成, ④出身地, ⑤居住履歴, ⑥職業

2) 団体について

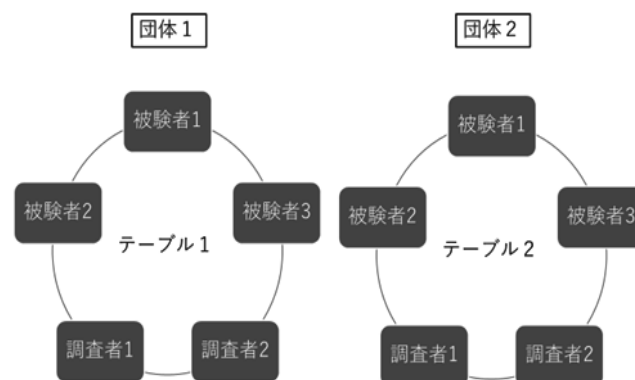


図1 テーブル配席イメージ

①活動概要, ②構成員の人数, ③発足年, ④参画理由, ⑤事業に対する評価, ⑥事業参画後の自身の変化（含む心理面）

3) 地域に対する評価

①地域の良いところ, ②地域の改善すべきところ

4) 将来意向

①定住意向, ②地域活動に対する意向, ③なりわい（職業）についての意向, ④所属団体についての意向, ⑤地域の将来像

5) 活動に関するニーズ（目的：課題の方向性）やウオンツ（手段）

①行政, ②地域

6) 地域で必要な施策

2. 事業制度の概要

2.1 事業の趣旨

南あわじ市における「地域の担い手づくり事業」は、同市が令和4年度に開催した地域との対話の場で表出した、若年層の地域活動に対しての参画を促す施策への期待を反映した事業である。特に新型コロナウイルス感染症の影響を受け、自粛を余儀な

くされていた時期が明け、地域行事の再興に向けた支援、令和4年度地域行事等再開応援事業（以下、再開応援事業）が実施される中で、地域内の40代以下の層が中心となって住民交流事業を企画立案し、年代の近い若者層をスタッフに巻き込んで事業を進める様子が確認できた。また、再開応援事業内に留まらず、市内の団体の中には、「地区」という枠組みを超えて、市内、島内の若者層がつながり、様々なイベントに取り組む事例も多く見られる。これらは、過疎化により地域の担い手不足が課題となっている地域においても、地域づくり事業を継続的に行うための有効な手段であると考えられる。

令和4年度の再開応援事業の結果と市内団体の活動状況、それに関するフィードバックを受け、令和5年度より開始した「地域の担い手づくり事業」では、市内在住の若者・青年層が主体となって実施する地域づくり事業に対して補助金を交付している。少子高齢化による地域の担い手確保や若者層の地域活動参画に課題意識を持つ地域に対して、「市内の若者層の(地域のプレイヤー)掘り起こし、さらに地域づくり協議会と連携・協力を繋げる動きを生み出す」ことを狙いとして定めている。

2.2 補助事業の概要について

令和5年度から実施されている「地域の担い手づくり事業」は、以下の要件の下で採択された団体が実施するものである。

(1)補助対象団体

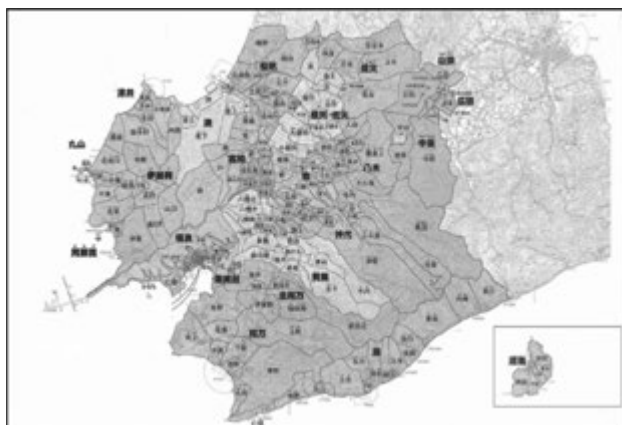


図2 南あわじ市の自治会・地域づくり協議会
(市内21地区※)

※ 広田、倭文、松帆、湊、津井、丸山、阿那賀、伊加利、西淡志知、榎列・倭文、八木、市、神代、三原志知、福良、賀集、北阿万、潮美台、阿万、灘、沼島

市内在住の若者・青年層（40歳代以下）3名以上が主体となって構成する団体

（すでに他の地域の担い手づくり事業実施主体となっている者を除き3名以上）

- ① 事業を行うために新たに設立するグループも対象
- ② 在住している地区以外の地域での事業実施も可
- ③ 法人格を持たない任意団体（〇〇実行委員会など）も対象
- ④ 申請は、1年度あたり1団体につき1事業に限る

(2)補助対象事業

市内21地区（図2）に設立している、いずれかの地域づくり協議会が同意する地域づくり事業（地域振興、環境美化、防犯、防災、子どもの健全育成、福祉、文化・スポーツ振興等）

例：納涼祭、婚活イベント、ハロウィンイベント、バザーイベント、スポーツ体験会、音楽祭、防災講習会、地域振興事業など

【対象外となる事業】

以下に該当する場合は補助金対象外となる。

- ① 若者・青年層が主体（中心）となっていない事業
- ② 地域コミュニティの醸成及び地域活性化を主たる目的としない事業
- ③ 既にこの補助金の交付対象となっている事業にかかるもの
- ④ 関係者の慰労等を目的とするもの
- ⑤ 飲食を伴う単なる親睦を目的とするもの
- ⑥ 特定の個人または団体の利益を目的とするもの
- ⑦ 政治活動又は宗教活動を目的とするもの
- ⑧ 公共の福祉に反すると認められるもの
- ⑨ 専ら営利を目的としたもの

(3)補助金額

事業（団体）当たり20万円

※実績額が20万円を下回るときは「実績額」

(4)事業年度（事業期間）

各年度、4月1日から翌年3月31日まで

(5)対象経費

補助対象となる経費は表1に示すとおりである。

表1 対象経費

報償費	イベントの出演者謝金
消耗品費	イベントにかかる消耗品
印刷製本費	イベントPRチラシの印刷費
食糧費	イベント準備、本番のスタッフ用に限る ※ 弁当は1食1,100円、お茶は1本150円が限度
役務費	事業実施にかかる郵便料金
委託費	警備委託、舞台設営費用
使用料 借上料	会場使用料、機材借上費

以下に該当する場合は、補助金対象外経費となる。

- ① 備品購入にかかる経費
- ② 事象実施者の経常的経費（団体運営経費、資産にかかる経費など）
- ③ 事業実施者の構成員に対する人件費
- ④ 支出内容の不明確な経費（領収書の添付がないものなど）
- ⑤ 他の補助金等の交付対象となっている経費
- ⑥ 社会通念上適切でないと認める経費

以降では本調査の対象とした11団体を【アルファベット】で表すものとする。

3 調査結果

3.1 調査対象者の特徴

(1) 調査対象者の年齢層と居住経緯との関係

調査対象者の年齢層と居住（経緯）の関係を図3に示す。本調査は若い世代を中心としたものであるが、図3に見るとおり20歳代から50歳代まで分布している。居住の経緯を見ると、②のUターン者が最も多かったが、その他のパターンもそれぞれ複数名分布していることから、幅広く意見が聴取できたと言える。

①生まれてから継続して南あわじ市（または近隣）で居住しているケースは1団体2名のみであった。他の調査対象者は②地元で生まれたが大学や就職を契機に他所への転出を経て地元でUターンしたケースと、もともと他所で生まれて南あわじ市に移住したケースとなる。後者は③婚姻などを契機に南



図3 調査対象者の年齢層と居住（経緯）の関係
注）アルファベットは調査対象団体を示す

● 女性 ● 男性

あわじ市出身者のもとに移住したケースと④南あわじ市との接点はなかったが、自由な選択で移住したケースに分けられる。②はいわゆるUターンと呼ばれるものであり、男性女性の傾向はないが、③は全員女性であり、④は全員男性となっている特徴が見られる。

20代の移住（Iターン）者は移住前の居住地において、特に南あわじ市との接点はなく、インタビューにおいても、直接南あわじ市を目指して移住したのではなく、情報収集や現地訪問の過程で南あわじ市の魅力を感じたことや企業への就職等によるものであることがわかった。

(2) 南あわじ市での居住パターン別に見た職業

調査対象者の現在の職業に至る経緯を（1）で示した4つのパターン別に以下に整理した。

① 地元（定住）

全員が南あわじ市で自営業 4名

② 地元→他出→Uターン

自営業（専門の資格等を生かした職を含む）4名

自営業（農業） 2名

公務 3名

③ 移住（婚姻等）

自営業（専門の資格等を生かした職）2名*

自営業（農業）2名*

*：1名は両方に従事

④ 移住（Iターン）

自営業 2名

会社員 1名

学生 1名

現在の職業は自営（専門の資格を生かした職、農業など）が圧倒的に多い。専門的な技術や知識を身につけて自身で収入源を開拓するか、地域の基幹産業である農業に従事することで、南あわじ市で定住することができる可能性があがると解釈できる。そのなかで一部、もともと家業を営む家系において業を継承する場合も見られた。

3.2 事業に対する評価

ここでは事業実施後の感想や意見、課題などの聞き取り結果を以下にとりまとめる。

【K】

- ・イベントでは幅広い年代の方が集まる場となった。
- ・都合上どうしても（イベント実施日の）告知が直前になってしまう課題があった。

【J】

- ・昨年度は初めてということもあり、あまりその地区の認識もなかったし地域づくり協議会との連携もあまりできなかった。
- ・今年度は連携してできた。また、新たにスタッフとして加わってくれた若い世代の方の存在がよかった。

【O】

- ・（イベント）前日までは不安だったが、実施してよかった。
- ・子どもを対象としたイベントであることを考えると2時間の開催時間で適切であった。
- ・適材適所に担当を振り分けていたおかげでスムーズに実施することができた。
- ・子ども対象のイベントでは滞在時間に影響を受けることがわかった。

【C】

- ・今まで移住者が異物を見るような感じで見られていたのが、移住者と地域の人が同じ作業をすることで親近感が生まれる。
- ・食事を共にとりながら地域と移住者のコミュニケーションができています。
- ・交流は成果を実感しにくい。うわべだけで会話やコミュニケーションはきっかけでしかないので10年経たないと分からない。
- ・顔を知ってもらうきっかけになったので、最初の移住するステップ時の課題は解決できた。

【E】

- ・事業は、情報発信という点に課題意識があり、地元の方々にもっと参加して欲しいという思いがある。その結果、地域の交流人口が増えるのではないかと考えている。
- ・コロナによる教育現場での子どもたちの活動が縮小・制限されたことを機に企画されたのがこのイベントであるが、ステージに立つという経験は子どもたちにとって良い刺激を与え、今後も継続していくことが大切になってくると考えている。
- ・子どもたち自身が成長し大人になったときに、また地域に戻って、この地域を盛り上げる担い手となってもらうためには、こうした活動を通して地域での思い出や記憶を作っておくことは効果的ではないか。
- ・イベントでは自分の出番が終わったらすぐ帰ってしまう方がいるため、他者の様子を見て最後まで楽しんで欲しい。

【M】

- ・イベント後に行ったアンケートからは、「本当に楽しかった」「こんなイベントあるんだったら絶対に行きたい」など様々な前向きな評価があった。
- ・実施メンバーで事前の交流会を通して仲を深めたことで、イベントの宣伝や準備にも積極的に協力し、チーム一丸となって当日を望むことができ、より出店者同士や来場者との輪を広げられたこと。
- ・課題点は安全でかつ十分な広さのある場所を確保できなかったことである。

【S】

- ・（来場者による）渋滞を予測して、分散の対策を行ったり車誘導をしたりしたことで、渋滞が起らずに済んだ。
- ・県外ナンバーの車が来てくれたことに喜びを感じた。
- ・地区を知ってもらえたというのは、これから先に絶対繋がっていくと感じている。

【A】

- ・資金援助はありがたい。
- ・この事業をやらなければ交わらなかった方々と関わり合えている。

【KA】

- ・地域の人たちがとても楽しみにイベントに来るようになった。

- ・継続することで、地元の人の参加率がどんどん向上している。
- ・世代それぞれにイベントを楽しむ異なった工夫がある。

3.3 事業実施後の自身の変化

ここでは実施した事業において、実施後に自身にどのような変化があったのかについて振り返った結果を以下に整理する。

【F】

- ・子どもを対象とする事業内容なので、子どもへの意識が変わった。
- ・もともと子どもは得意ではなくて、「今日も騒いでいるな」くらいの感覚だったが、何に興味を持っているのかを考えるようになったり、どうしたら仲良くなれるか考えたり、様子をよく見るようになった。

【O】

- ・イベントによって全員集まる機会があつて、話もできたので癒しになった。
- ・メンバーとのつながりが強くなった。これまでは遠慮気味だったことでも愚痴も言いやすくなった。
- ・人に頼って、信じていいんだと思えるようになった。
- ・軽い感じで実施することになったが、(実施して)楽しかった。達成感があつた。

【M】

- ・実際にイベントを主催して、単にイベントを企画し当日限りで終わりにするのではなく、参加者同士が事前に繋がっておくことで、新たな出会いや輪が広がっていくのだということを体感し、相互の関係性の大切さに気づくことができた。

【S】

- ・事業に参加してみて、自分たちの地元は思っているより魅力があるのだと感じた。

【A】

- ・知り合いや顔見知りが増えた(特に、30代の人たち)。
- ・担い手事業で一緒にイベントを企画する中で、想いや個性を分かちあう楽しさがある。

【KA】

- ・自分らの子どもたちに遊ぶ場所を作ってあげられる。

- ・この街に恩返しできたかなという思いとともに嬉しさがある。

- ・盛り上げて、子どもらを楽しませて、この街を好きになってまた帰ってきて欲しいという想いがある。

3.4 事業(団体)に対する地域の反応

事業や主催団体に対して地域からどのような意見や評価が見られたのか、主催者が見聞きした事項について聞き取り結果を整理する。

【F】

- ・交流のある親世代は「うちの子が楽しみにしている」と声を掛けてくれるなど、地域でも話題になっている。
- ・店舗で作業をしていると、目の前を通る人が「何してるの」とよく声をかけてくれる。

【K】

- ・はじめは年配世代と若手の考えの違いがあり、調整に苦労をした。
- ・もとは自治会が主体であつたが、若手に任せてもらえるように伝えてからは任せてくれるようになった。
- ・今年度は理解が得られた。

【C】

- ・地域の人に気にかけてもらうきっかけになる。
- ・学生と地域の人がふれあったり、学生も体を動かしながら楽しくやれる。
- ・地域には人の手がないため若い人と交流したいという意識がある。
- ・60代後半や70代の人などは自分たちが孫世代なので楽しそうにしている。

【E】

- ・(イベントが)地域全体に周知されておらず、知らなかったという人も出てきたことから、地区内でチラシを配布するようになった。
- ・地区内に留まらず、周辺の地区の親子が事業に関わることで、新たな出会いや繋がりによって交流人口が増える点が良い影響を与えていると考えている。
- ・こうしたイベントを通して、自分も出てみたいと声を上げてくれる方も広がっていている。
- ・子どもたちだけでなく、大人も一緒に出演者となったり、プレイヤーとして出たりすることで、大人

の本気で頑張る姿は子どもへの良い刺激になる点や三世代交流の場としても機能している。

【M】

・イベント後に行ったアンケートから、「本当に楽しかった」「こんなイベントがあるんやったら絶対に行きたい」など様々な前向きな評価を頂けた。

・（事業実施によって）生まれた繋がりから淡路島で活動されている様々な業種から集まる新たなコミュニティが発足し、我々と新たなコミュニティとが重層的に繋がるようになった。

【S】

・事業を始めようとなった時に、「自分たちはまだ若いしやってみよう」と皆さん熱が入っていた。

・一部の人は反対していたが、9割の人は賛成だった。

【A】

・「がんばってなあ！」「おもしろそうやん！」という声をいただく。

・自主的にイベントに（提供側として）参加したいという声もある（知り合い：岡山、大阪から）。

・イベント時は道路を占有するので、地元の協力がないとできない。

・（イベント実施に際し）地元の組織（商工会）に相談した際、適切な助言がもらえた。

【Y】

・淡路市の他地域からも（イベント）出店者がある。

・知り合いになったイベント業者の方々が無償で手伝ってくれた。

【KA】

・他の地域の子どもたちより、地元の子どもたちのモチベーションが高くなっている。

・始めた最初は子どもたちの関心が薄れている傾向があったが、今は率先して関わるようになっていく。

・毎年、イベントを主導する3つのグループがいろいろな場所へ顔出しと挨拶を行っていて、良い循環サイクルとなっている。

3.5 地域に対する評価

調査対象者が地域（南あわじ市もしくは市内居住地区など）に対して抱いているイメージや評価について、（1）地域の良いところ、（2）地域の改善す

べきところの2つの視点で聞き取り調査を行った。結果を以下に列挙する。

【F】

（1）地域の良いところは？

・（地域外の人に対する）「境界線」がないところ。

・地域を維持していくために、できるだけ地元にお金を落とそうとする意識や30代、40代で子どもをたくさんつくろうという意識が高い。

（2）地域の改善すべきところは？

・「境界線」が無さ過ぎるところ。プライベートが薄かったり、距離が近すぎたりするため、合わない人にとっては、想像していた田舎暮らしではないのか。そのため、自分たちが移住者を呼び込む際に、地域の人に合うかどうかを見極める必要がある。

・現状に対する地元の人の認識があまりないことが問題である。

【K】

（1）地域の良いところは？

・年間を通して様々な行事ごとがあり、人が集まる機会が多く、地域ぐるみで取り組むことがほとんどである。

・敬老会や納涼祭など定期的に集まる。

・人のつながりがピラミッドのように年代が重なっていて、バトンを下の世代へとつないでいって伝統行事を引き継いでいっている。

・子どもの数も比較的多く、国道沿いは立地条件も良いため新興住宅が多々ある。

【J】

（1）地域の良いところは？

・立地が良く、住む場所として候補があがるようなことに繋がると感じている。

・買い物をする場所があること。

・小規模校なりに子育て世代の保護者同士の繋がりが深く一致団結しやすいこと。

・地域の活動にも参加しやすい。

（2）地域の改善すべきところは？

・若い人が少なくなってきた。

・未婚の若い方と繋がれるような環境がない。

【O】

（1）地域の良いところは？

・地域の人との関わりが強い。

・挨拶をすると返してくれたり、話しかけてくれる人もいるところが好き。

・地域の人が登下校の時毎日しっかりついていてくれる。

・子ども食堂が月に1回あり、地域のおじいちゃんおばあちゃん、大学生と交流できる。

・地区にある学校は人数は少ないが、丁寧に一人ずつを見てくれる地域であるところ。

【C】

(1)地域の良いところは？

・地域に入ったら仲間意識がすごい。集落でやっている感じだから入りやすい。

・数字とか損得関係なく、物々交換が淡路はよくある。

・大学生などがおじいちゃんおばあちゃんから野菜や魚をもらったり、孫のようにかわいがってもらえる。

・自然と地域に入って交流ができる。

・淡路の人はシャイで怖そうに最初は見えるが、人柄がいいしおおらかで懐が広い。

(2)地域の改善すべきところは？

・最初入りにくいところ。コミュニティも小さい。
・課題というか注意程度だが嗜好きの地区もあるのでやり玉にあがることもある。

・地区の中でも交流のあるところとないところがあるため、移住に限らずコミュニケーションのずれがある。

・パイプ（つながり）があって情報が伝わるとそういうずれがなくなる。

・農業をやめたあと新規就農者とのパイプがないため新規就農につながらず、大きいところに吸収されてしまう。

【E】

(1)地域の良いところは？

・地域の中で何かやりたいという思いを汲み取って、気軽に声を掛けあい、協力し合える土壌が据わってきている点が良さに繋がっている。

(2)地域の改善すべきところは？

・郷土愛が強すぎる点が良くも悪くも、地域内の閉鎖的な流れを作ってしまうのではないかと懸念している。

・世代間のギャップや年齢の変化から生じる価値観の違いを全て受け入れるのは難しく、地域住民と

のやりとりの中でうまく探りながら、イベントを円滑に進めていくことの大切さも感じていると話していた。

【M】

(1)地域の良いところは？

・ご飯が美味しい（米、野菜、魚など）。

・美味しい水が飲める。

・郷土愛が強い。

(2)地域の改善すべきところは？

・子育ての環境の充実や支援政策が足りていない点

・外部の方が淡路島を盛り上げてくれている一方で、淡路島らしさや本来の色が弱まってきている。

・淡路島で活動されている地元の方を線で繋いでいくことにまだ伸び代がある。

【S】

(1)地域の良いところは？

・徳島の山に沈む夕焼けの景色

・魚が美味しい。

(2)地域の改善すべきところは？

・道路が狭くて、中に施設ができて大型バスがなかなか入り込めない。

・食料品店がない。

・ガソリンスタンドがない。

【A】

(1)地域の良いところは？

・景色（田、海、山、夕陽）がよい。

→ 地元住民が気づかないのがもったいない。

・自身のこれまでの住環境から「海」が一番センセーショナルである。

・子育てに関して、

① 保育園や学童に待ちがなく、どこでも入ることができる。

② 見守っていれば、どこを歩かせてもそんなに危険なことがない。

③ 他人に頼み事をしやすい（以前は社宅でギスギスした感じ）。

・お祭りや地域行事の一つ一つに意味や想いがある。

・「ふるさとを創ること」はこういう感じなのかと気づいた。

・他の人（島外の人等）からの評価がいい。

・友だちから教えてもらい気づく「玉ねぎ美味しい」「空気おいしい」「星綺麗」

・食べ物（山の幸、海の幸）全て美味しい。
→ もっと淡路を宣伝したい気持ち。

(2)地域の改善すべきところは？

・やらないといけない行事が多い（特に男性）
・働くところがない（土地はあるけど）。
・南海トラフ等の地震を懸念している。
・保育所・小学校の人数も減ってきている。
・変えていけるところは変えていけばいいのに、例えば、1個行事を増やすんだったら1個減らせばよい。

【Y】

(1)地域の良いところは？

・空、海、山（ビルだったら見えない景色）
・慣れた風景だけど、須磨から来た親戚とかは褒めてくれる（「まあ、すごい！」）。
・星（夜）が綺麗。曇りじゃなければ、星座も見える。
・玉ねぎが美味しい。

(2)地域の改善すべきところは？

・狭い地域性
・窮屈という人／近所付き合い
・多様性の中で仕組みを変えていってほしい。
・選択肢が少ない。
・同調圧力が強い（誰か一人が言ったら、その次の日にはすぐ広がっている）。
・小学校や中学校の荒れている状況

【KA】

(1)地域の良いところは？

・祭りに対して、子どもたちに活気がある。
・米も魚も野菜も、山の幸（たけのこ）とか果物も美味しい。
・「郷土愛」というより、周りの人に恩返しするという感じ（お世話になった人が多い）。
・移住してきた人たちが、根を張って結婚して、子どもも産んだ。
・情が熱い

(2)地域の改善すべきところは？

・運営費
・もう少し収益をしっかりと上げていかなくては、スポンサーがいなくなるとたちまちできなくなってしまう。

・今までの運営は町内会や老人会の人が動員されて、人数はいたが生産効率はかなり悪かった。

・便利なものを取り入れたり、生産効率を上げたり、もうそろそろ鍬から、何か違う武器にガラッと変える視点を持たないといけないのではないかな。

・外国人観光客は、アジア系の人たちが渦潮を見に来るくらいで、町中に入ってくることはない。

・「昔の」は大事だが、そのまま昔の賑わいを取り戻すことは難しいので、新しいことをしていく必要がある。

3.6 将来意向

調査対象者が将来をどのように考えているのか、自身のこと、地域のことなどについて自由に発言をしていただいた結果を以下にとりまとめる。

【F】

・定住していく意向をもっている。
・昔から廃校にあこがれがある。保育所のような規模でなにかワクワクするようなことがしたい。
・銭湯をつくりたい。商店街で昔やっていたことを復活させてまちを盛り上げたい。
・地区での職を増やして、移住者でも暮らしていける環境をつくりたい。

【K】

・農業をしている以上はずっと住み続ける予定である。
・淡路で働きたいと思う人（外国人も含めて）が増えたら 農業の方も1番いいのではないかな。
・外部からというよりも地域の若い世代につないでいきたい。

【J】

・地域活動を続けていきたい。

【O】

・これから地区を出ることはあるかもしれないが、戻ってきたいという思いはある。

【C】

・5年くらいは農業を続けていく。
・仕事があるうちはいる。子供が10歳になるため、教育面から移住するかどうするか考えないといけない。南あわじ市には高校等が少なく、習い事も遠い。

【E】

・これから人口減少に伴い子どもたちの減少も大きい、機会の場合は今後も継続して提供していきたいと考えている。

・今後自分たちよりも若い 20 代から 30 代の人たちが、地域の中心となってやりたいことを企画し、積極的に地域の担い手として前に出てきてくれることを期待している。

【M】

・新たに出来たコミュニティのメンバーを中心に、淡路島のホンマもんを大切にしながら、行政と一緒に淡路島が抱える困りごとや問題を解決していけるのではないかと期待がある。

【A】

・誰でも来たらいいと思うが、都会にあるものをそのまましてもうまくはいかないので、良さを活かしつつやっていったら、色が出て面白いのではないかな。

・活気づいてほしい。

・地区にいたい、住みたい、来たいって思う人は住んでいただいていいと思う。

・コロナの時期から（淡路島に）色んな会社が入ってきて、地域と親和性は高くない。

・コンテンツに対しては、乗っ取られている感じがするが、栄えていっているのは事実だと思う。

3.7 活動について具体的な展開方向や方法

活動をどのようにしていきたいか、その際にどのようなサポートや援助があればよいのかについての意見を以下にまとめる。

【F】

・Instagramなどでの情報発信。

【K】

・団体の構成員を増やしたいのはもちろんだが、あと 1 年で市の補助金が終わってしまうため、これでやめてしまうのかどうかを考えていかなければならない。団体を発足している以上、次の世代にバトンをつなげていきたい。

・自治会にも地区としてお金の出るあり方をもう一度考えてほしいと伝えている。また、お金をかけなくてもできる行事のあり方という考えをもっていきたい。

・地域おこし協力隊などの人材面の派遣という点では「地元」というくくりで活動しているため今のところは考えていない。

【J】

・来年も声をかけて活動を継続させていきたい。

・楽しいイベントを通じて少しでも多くの人に地元愛を感じてもらい、「やっぱり南淡路に住もうかな」と思ってもらいたい。

・イベントの周知の方法として、全戸にチラシを配布したり、回覧板を回したり、近くの施設にポスターを貼ってもらったり、公民館のインスタグラムでお知らせをしたりしている。

・体育館で行うイベントなので足の悪い方や高齢者の方は少し敬遠されるため、その辺りの課題を解決していきたい。

【O】

・始めるときに継続して毎年やろうという趣旨ではなかった。

・何かをするのなら手伝うつながりはできているが、今のところ何かやりたいという人はいないので継続的にする予定はない。

【C】

・この地域づくりの事業自体はあくまでもきっかけで、そこからは勝手に回るものだと考えているので、自然と回り始めればいいかなと思っている。

・農業は入りすぎると逃げられなくなる。

【E】

・地区の特徴として 60 代以上の世代は様々な野外活動を活発に行っており元気な印象がある一方で、20 代から子育て世代になると、どうしても外の活動に出向く余裕がない方々も多くいることがあるため、そこをどうにか盛り上げていきたい。

・地区住民の世代間ごとの価値観の違いや世代間ギャップがある中で、イベントや事業を今後も円滑に進めていくためにも世代間の距離を埋めていくことや、何かをやりたいという声を汲み取りそれを繋いでいくことが重要である。

【M】

・安心安全に持続可能な形でイベントをしていきたい。

・自身を含めた家庭のライフスタイルの変化に柔軟に対応しながら、その都度、目の前の状況によって選択肢を決めていきたい。

【KA】

・外に出る意向はない。

- ・移住は、勝手に来てくれたらいいなと思う。わざわざ「来い、来い」と呼び込むのは違う気がする。
- ・20代、30代の子が発展させてくれるようにならないと衰退と同じである。
- ・人口を上げるのは難しいので、関係人口や子どもたちの幸せ指数とかを子どもらに故郷に戻ってきたいって思わせるのが役目だと思っている。
- ・一回外に出ていくのはいい、でも年いって淡路、地元に戻ってきてまた盛り上げてほしい。

3.8 地域で必要な施策

事業を実施してみて、今後地域においてどのような施策が必要と考えているのか、それに対する意見を以下に整理する。

【F】

- ・事業に対する資金があると動きやすい。
- ・慈善事業やおもしろいことなどをしようとするとうとうともお金がかかってくる。資金があると、よりスピーディーに動くことができる。

【K】

・農業を新規で始めるとなると道具も何もない状態からのスタートで借金を背負わないといけない。利益もそこまでないし、どこまで続くかわからない。現在、新規就農で3年間150万という補助金があるが、それだけでは全然足りない。また、団体を運営していく中で資金はやはり必要。企業に協賛をお願いするなど自分たちで集めることも不可能ではないが、支援はわずかでもあった方がいい。

【J】

- ・働ける場所を増やして欲しい。
- ・資金の援助
- ・他地域で担い手として活動されている方との交流会

【O】

- ・手伝ってくれる人がいてもいいと思う。そのため、市でボランティアの登録みたいなのがあれば、一人だからできないと思っている人もできるのではないか。
- ・登録したらこういうイベントがあるということをメールで回すなど

【C】

- ・行政のサポートを求めてやっていない。

- ・20万円の使い方に制限がないためやりやすく、厳しい条件だと始めづらいから今のやり方がいい。
- ・お金がたくさんあっても大きいことができないし余っても困るので20万円がちょうどいい。
- ・行政にコミュニケーションをもっととってほしい。就農相談の時個人に深くかかわれる感じではなかった。イベントを行ったときも3回目で行政の人が来た。次こうすればいいなど話し合うために1回目とか早い段階で来てほしい。
- ・下宿先がないため学生を増やしたくても増やせない。

【E】

- ・活動していく際に、我々の活動に対するノウハウに加えて、地域の補助やサポートがあれば嬉しいと話していた。
- ・市で掲げている「学ぶ楽しさ日本一」とは、本質的にどういったものなのか知りたい。
- ・学校が子どもたちへの教育に対してどう向き合っているのか知りたい。

【M】

- ・イベントメンバーや新たにできたコミュニティメンバーと協賛、共催という形でのサポートしていく。
- ・イベント時に机や椅子を運んだりすることが結構大掛かりですごく体力を使ったので、手伝ってくれる人員がほしい。

【KA】

- ・各地区それぞれの地域課題を解決するためだけの部署を置いたら良い。
- ・それぞれの地域限定で、それぞれの課題を解決していく。
- ・縦割りじゃない部署（総務／特務部署）

4. 考察

人口減少や高齢化が進行している農村地域においてはコミュニティの維持が次第に困難になることが懸念され、如何にして次世代の担い手となる人材を確保しながら持続可能なコミュニティを再編していくことが喫緊の課題となっている。

淡路島全域は、「あわじ環境未来島特区」（地域活性化総合特区）として、エネルギーや農と食、暮らしの持続を実現できる地域を目指す第3期特区

計画のまっただ中にあり、また、2023 年から淡路島総合観光戦略が策定され、観光を通して地域住民が豊かに暮らせる環境づくりに取り組んでいる。

南あわじ市では、2 章で紹介したとおり、次世代の担い手としての若年層に着目して地域活動を主催、参画する取組に対して、そのインセンティブとなる補助事業を設け、人材育成・確保と地域づくりへの機運の醸成に努めている。

これからの持続可能な地域のあり方を検討するうえで、若年層の思考様式や意向を把握することは地域の維持・発展にとっては重要な鍵となる。本研究では主体的に地域活動を行っている若年層に対するインタビュー調査を通して、若年層と地域（南あわじ市）との関係性を検証した。

本章ではインタビュー調査で得られた知見を要約するとともに、課題と今後の展望について若干の考察を加えた。

4.1 インタビュー調査結果の要約と若干の考察

ここではインタビュー調査で明らかになった知見をテーマ別にあらためて整理するとともに、今後の課題についても触れておくことにする。

(1) 郷土愛・地域の魅力

インタビュー調査の対象者の多くは郷土に対する熱い思いが根底にある。もともと南あわじ市で生まれ育った住民は他出の経験があるなしにかかわらず、おしなべて地域に対する愛着があると受け止められた。

一方で生まれは地域外であっても、例えば婚姻を契機として移住をしてきた者でも住み続けながら地域への愛着が育まれているとの印象をもった。また、これまで全く南あわじ市との接点がない場合では、偶然の巡り合わせなどもありながら、地域の魅力を感じた結果、定住を選択していることから、何らかのきっかけをもつことで地域の魅力が伝わり定住に結びつくことがわかった。

子どもの頃からの習慣や地域での活動が大人になってからの愛着につながり、比較的若い年齢で南あわじに U ターンを決断させていることが明らかとなった。農業やその他の家業を継承するためにふるさとに戻ることにした者も少なくない。

(2) 地域資源の価値の再認識

多くの調査対象者が南あわじ市の美しい風景、自然環境、人柄などを評価している。ただし、日常的なかでそれを意識し続けることは意外に難しいため、地域の良さを確認する場や機会が大切であると思われる。このようなインタビュー調査はそのことを認識する良い機会となるとの意見が見られたことから、本調査の意義が認められる。地域住民主体のイベントや交流機会を積極的に設けることで、地域の価値をもう一度見直すことにつながるであろう。

(3) 伝統文化の継承

淡路島は人形浄瑠璃の発祥の地として、子どもたちが小さい時から伝統を継承していくための取組があり、その体験が成人した以降も住民の心の礎になっていると受け止められる。しかしながら、人口減少や高齢化で地域の伝統的な行事の維持が難しくなりつつあることも事実であるが、インタビュー調査に見る限りは南あわじ市ではまだそれらを守る強い精神が受け継がれているように感じられた。地域外から伝統・文化に関わることにに対する抵抗感も比較的低いように理解される。ただし、時代によって伝統行事を維持していく形は変化するものと考えられ、必ずしも古い時代のまま継続することに固執する必要はないと思われるが、どのような形であれ伝統を継承していく仕組みを維持することで、その重要性や意義が次代に大切に受け継がれていくことが示唆された。

(4) 働く環境

資格や専門的な知識・経験をもった方が活躍の場を見つけている。農村地域では働く場所が少ないことが人口減少問題と関連づけて議論されることが多いが、新規の定住者の視点でみれば、その問題に対抗するために、①資格・専門性の高い仕事を生かすこと、②家業を継承すること、③南あわじ市の強みである特産物（農業・水産業）を生かすこと、④公的な仕事に従事すること、などが挙げられ、自身や地域の強みを生かした仕事をメインとしながら、地域づくり活動に並行して取り組むことができていることがわかった。また、専門的な仕事の中で出会った人とのネットワークを広げることで、地域づくり活動に参画を呼びかけ、新たな人材確保につながっている例も少なからず見られる。その影響の範囲は南あわじ市内にとどまらず、他地域にも波及し

ており、担い手が担い手を生むことができる好循環の現象を確認できた。

さらに、公民館などの公的な職場に所属し、地域づくり活動に関わるなかで、地域の良さやなどこれまでにない気づきを得るとともに、人との関係性の深化に寄与していることがわかった。

(5)男女両者の活躍

農村は地域によってはまだ男性社会の傾向が色濃く見られる。南あわじ市でも場面によってはその傾向が残っているかも知れないが、本事業に見る限り、男性だけでなく女性の活躍の場が多くあることに気づかされた。さらに男女双方がそれぞれの強みを生かして地域を盛り上げていくことが重要である。

本事業はイベント系のものが多く、自治会などに関連した日々の業務とは異なっているが、今後は地域のあらゆる場面において、男女関係なくその役割を果たしていくための地域の理解・合意が重要であると考ええる。

(6)住民間・世代間の交流

「地域の担い手づくり事業」は若者層が中心となる活動を支援するねらいがあるが、団体によっては20～40歳代の若手だけでなく幅広い世代の交わりがみられ、世代を超えた学びあいが生まれているといえる。

また、「地域の担い手事業」を通して、主催者と地域住民との交流機会が増えていることも高く評価できる。しかも若年層の取組に対して、世代を超えて地域住民が関心を寄せたり、参画していることもインタビュー調査で明らかとなり、事業への取組の効果として評価できると考えられる。

(7)外部人材の獲得

地域外の出身者でも地域に存在する組織に所属しながら地域づくり活動に積極的に関わっていることから、外部人材の重要性が示唆される。その際、南あわじ市では受入のハードル（物理的、精神的両面で）が他地域より比較的低いと思われ、そのことが外部人材の活躍をサポートしていると思われる。

ピンポイントで南あわじ市をターゲットにした移住ではないケースが見られた。このことは地域のPR次第、受入条件次第で、移住者を誘引できる可能性を秘めているということにほかならない。

4.2 今後の展望

調査結果をもとに今後どのような点に留意をして地域づくり活動を推進していけばよいのか、以下の8つのポイントについて若干の考察をしておくたい。

(1)さらなる若年層の活躍の場の創出

本事業で若年層が活躍していることが明らかとなった。その効果は市内にとどまらず、淡路島さらには他県にも拡大している様子がうかがわれた。地域の担い手となる若年層を継続的かつ強力に支援をしていくことが必要であると考ええる。

(2)子どもを対象とした支援活動の推進

郷土愛、ふるさとへの愛着は子どものころの体験や学びに依拠している。ふるさとの良さ、人とのつながりなど子どもが地域とかかわり、地域を良く知る機会を積極的・継続的に創出し、一時的に転出してもいずれ南あわじ市に戻ってくるような、ふるさと回帰、自然回帰、田園回帰の心を育てていくことが望まれる。

(3)地域資源の掘り起こしと保全

地域には多くの資源（農地、海、伝統・文化、人材など...）が存在している。時代の変化でその意義や重要性が変化してきているが、普遍的に継承すべきもの、維持すべきものがあるであろう。それらを確認するとともにどのように次代に継承していくのか、その方法を市民で考えることが重要である。

(4)住民間の交流を図る機会の創出

多様な年齢層、世代が交流することで地域の活性が高まっていく。交流を促進することで、課題が共有され、結果として新たな取組や関係性が生まれてくるであろう。それによって地域の担い手確保の可能性も大きくなるものと思われる。

(5) 必要性の高い専門的知識や体験を持つ人材の誘引・確保

地域で不足しているもしくはニーズがある労働や役割の種類を精査し、具体的なターゲットを明確にして人材育成、確保に向けた取組を進めていくことを検討してはどうだろう。少し国レベルの大きな話になるが、例えば、かつてニュージーランドでは専門的な人材不足を解決するために、特定の専門職的な経験がある者（例えば自動車整備士、医師など）に対してビザの取得が容易になるインセンティブを与えてきた。南あわじ市で不足している労働や役

割があるように思われる。それらを支援する仕組みを整備することによって、人口の確保にわずかでも貢献できるのではないだろうか。

(6) I ターン者を受け入れる条件整備

南あわじ市は外部には魅力ある地域として捉えられる可能性が高い。これまで以上にその魅力をさまざまな方法で情報発信し、南あわじ市をよく認知してもらう取組が重要である。また、南あわじ市は他の市町よりも外部人材の受入ハードルは低いように思われるが、それでも農村地域独特の壁が残っていたりする可能性もある。外に対する積極的な発信とともに、壁となりそうな内部構造を見直す機会も必要ではないだろうか。

(7) 観光人口（国内外）を増やす魅力づくり

淡路島は全体が観光戦略の傘下にあり、多くの観光客が来訪している。ただ、地域資源はまだ十分に活用できていない面もある。とくにインバウンド観光についてはこれからさらに強化していくことで、地域の活性が図れるものとする。全国各所で問題となっているオーバーツーリズムに配慮しながら、地域の可能性をあげていく施策や取組が望まれる。

(8) 人口減少下でも持続可能なコミュニティ再編

農村地域では人口減少によってコミュニティの機能が弱まりつつある。人が減っているのであるから、従来と同様のことが維持できないのは自明のことであろう。それでも将来に地域を存続させていくために、従来の仕組の再編が必要である。例えば集

落が担ってきた機能の大幅な見直し、これまで表舞台にたっていなかった人材の発掘、人にかわる新たな技術の導入など、時代の変化にあわせた新しいコミュニティの姿を議論すべき時に来ているであろう。

【謝辞】本研究は、令和6年度南あわじ市委託研究「地域の担い手づくり事業検証業務」による調査をもとに行ったものである。

調査・研究に際して、南あわじ市総務企画部市民協働課の露本和也氏、赤坂俊彰氏をはじめ関係各位に大変お世話になりました。また、インタビュー調査にあたっては事業採択団体の関係者に絶大なる協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

【参考文献】

1) 南あわじ市（2024）「令和6年度地域の担い手づくり事業補助金」

<https://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/soshiki/kyoudou/ni-naitedukuri.html>

（最終閲覧日：2025年2月13日）

2) 南あわじ市 市民協働課（2024）「令和6年度 地域の担い手づくり事業概要書」

https://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/uploaded/life/3396_98_410871_misc.pdf

（最終閲覧日：2025年2月13日）

3) 南あわじ市行政提供資料